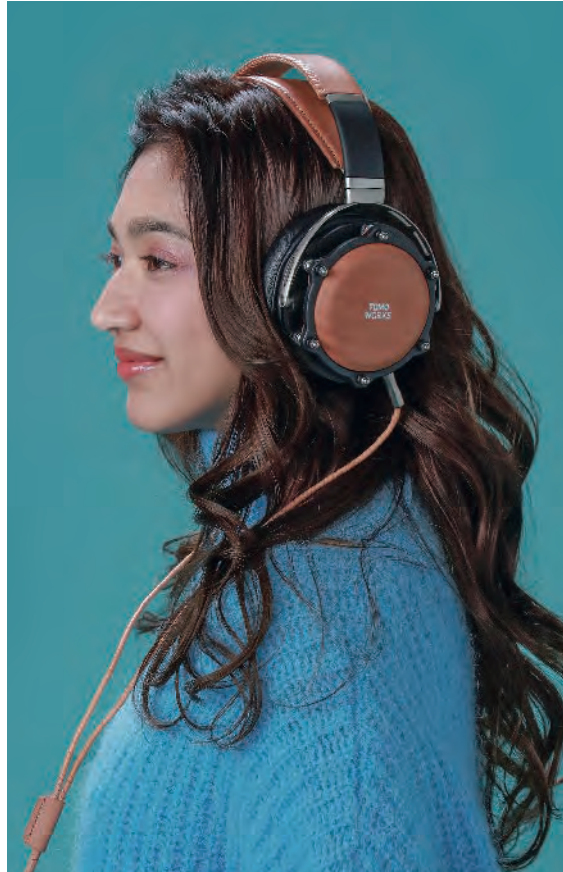




国内最大の革製品コンテスト

ジャパンレザーアワード 2025

受賞・入賞作品ブック

FOOTWEAR BAG WEAR&GOODS FREE STUDENTS



ジャパンレザーアワード2025 入賞作品

18回目の開催となる「ジャパンレザーアワード2025」は、いまや国内最大の革製品コンテストへと成長した。今年は全国各地から232作品の応募が寄せられ、その中から審査員によって厳選された53点が「入賞作品」として選ばれた。デザインの完成度やクラフトマンシップはもちろん、新しい時代の感性を映し出す意欲的な作品も数多く登場。革という素材の可能性を広げる、多彩なクリエイターたちの挑戦がここに集結した。



瀧本 武さん

DECOプレーントップローグ
(ハンド ソーンタイプ)
フレッシュブラック

～Tomokita～



永桶 拓郎さん

猪革ジャーマントレーナー

個人



橋本 啓佑さん

馬と鮭

個人



佐貝 洋司さん

シームレスオックスフォード

個人



佐藤 健さん

スマートカジュアルスニーカー

株式会社リーガルコーポレーション



FUMOTO 一乃麓さん

CORDOVAN BOOTS

個人



三上 良弘さん

革と西陣織の協奏靴

株式会社ネーカーズ



寺田 尚由さん

SOLID

株式会社いたがき



石橋 善彦さん

パンチングレザー
刺し子ライダースver.1 専用
パンチングレザー
刺し子ボディバッグ

有限会社オベリスク



野沢 浩道さん

Doc Tote [TIME]

個人



正木 季子さん

泥染馬革を使用した
革絞りトラベルポーチ

株式会社鞆工房山本



末永 るみえさん

玉響 (tamayura)

Suenaga Design Studio



佐藤 周平さん

レザー PCケース

エース株式会社



福 裕一さん

三日月トートバッグ

アトリエハトリベ



高橋 幹大さん

ガーメントート

個人



井戸田 和之さん

ランセル

株式会社村瀬鞆行



小川 陽生さん

KaWanoMirai

GNUOYP (ニュビ)



小花 亮介さん

涼しさ持ち歩く、
空調ファン搭載トート

アールアトリエ中目黒



古田 光さん

Dullesbag "piccolo"

billknocks



森 直之さん

Slotto (スロット)

ルボア株式会社



矢野 悟さん

小さくても大容量の
シームレス財布enzima(エンジーマ)

バンビマニュファクチャリング
株式会社



小川 陽生さん

TENMIZO GAMAGUCHI #3

GNUOYP (ニュービ)



加藤 友樹さん

エントルフィーノスエード
A-2フライトジャケット

有限会社T.M.Y's



山口 洋平さん

leather “丸亀団扇” mini wallet

atelier Ripple



合田 貴子さん

セイコープレザージュ×リーガル
クラシックスタイルを楽しむ
特別な限定モデル

セイコーウオッチ株式会社
株式会社リーガルコーポレーション



石塚 昌美さん

シバ

イシツカ靴店



中口 智仁さん

わがままな可能性

shoes studio tomo.ni



木下 実さん

誘引 ハエトリグサ

課題商店



木下 実さん

誘引 ウツボカズラ

課題商店



瀬藤 貴史さん

Goals of Arrival #6
～たどり着いた場所～

個人



関口 善大さん

半透明のスリッポン

関口善大靴工房



伊藤 敦史さん

墨流し-ART

株式会社リーガルコーポレーション



加藤 友樹さん

オールスエードのスニーカー

有限会社T.M.Y's



井上 篤さん

「ZIPANGU
～the Golden Country～」

「ATSUSHI INOUE」



野沢 浩道さん

Rocking Bag

個人



福 裕一さん

御蔵黄楊と栃木レザーの
トートバッグ

アトリエハトリベ



岡田 憲樹さん

RAIJIN-KAMINARI-ENGINE

株式会社村瀬鞆行



井藤 憲一郎さん

HAND-BAG

創作工房 井藤



椎名 賢さん

slit to stretch

Ken Shiina Design Laboratory



北崎 厚志さん

吉祥本白鞆し
印伝革手持口棹鞆

chelsea leather art work



石橋 善彦さん

ロストボディ レーシングジャケット
(転生したら革ジャンでした。)

有限会社オベリスク



加藤 友樹さん

ラムレザー スタジアムジャケット

有限会社T.M.Y's



谷口 諒司さん

カーリーレザーブレスレット

革所



ウエダ トモユキさん

Percussion

TOMOWORKS



谷川 史憲さん

革の帆船

個人



高松 智明さん

カケラの守り人

有限会社グランツ



谷藤 嵩さん

Accordia

個人



香田 総志さん

桜鯛のマルチWAYバッグ

上田女子服飾専門学校



国田 来愛さん

大阪のおばちゃんの魂

兵庫県立姫路工業高等学校



森崎 里咲さん

ダンボールに入った命

兵庫県立姫路工業高等学校



坂井 帆海さん

シンデレラの夢を叶える
カボチャバッグ

東大和市市立第三小学校



岩佐 音花さん

BAKERY

奈良芸術短期大学



盛田 結子さん

筋肉ジャケット

奈良芸術短期大学





フリー部門
フューチャーデザイン賞

ウエダ トモユキさん
UEDA Tomoyuki

〈作品名〉
Percussion

〈所 属〉
TOMOWORKS



受賞者動画を
配信!



購入は
こちらから



ハウジングを 革太鼓に見立てる

古くから、皮革は楽器に欠かせない素材であった。とくに、ドラムやパーカッションのヘッド（打面）に「皮」が使われているケースは多く、例として、日本の和太鼓、インドのタブラ、西アフリカ諸国にルーツを持つジャンベなどが挙げられる。

この関連性を踏まえ、ヘッドホンのハウジング（スピーカーの役割を果たすドライバーユニットを内包している筐体）を太鼓に見立てて「革」で製作されたのが、「ジャパンレザーアワード 2025」のグランプリ受賞作、「Percussion（パーカッション）」だ。「僕は以前からヘッドホンをつくっていたのですが、ジャパンレザーアワードへの応募にあたり、これまでヘッドバンドにしか使っていなかった革を各部に用いてみようと考えまして。そこから、スネアドラム（両面太鼓の一種で、裏面にスネアと呼ばれる響き線が張られている）のようにハウジングの表面を革張りにするというアイデアが浮かび、ヘッドホンとレザークラフトの融合を試してみることになりました」

そう語るのは、製作者のウエダトモユキさん。こうして、巧妙なギミックの施された独創性に富むヘッドホンが誕生した。

構造上にいくつかのポイントがあるが、まずはハウジングに焦点を当てよう。ウエダさんは、外側のイヤークップをスネアドラムのヘッドになぞらえているのだが、革をただ張って固定するだけではなく、精緻な技巧を盛り込んでいる。

「ウェットフォーミングといって、水で濡らした革を型に押し当てて乾燥させ、立体的にする技法を駆使しています。この革をボルトでボディに固定しているのですが、革のテンションによって音が変わる構造になっており、パワフルな中低音が鳴るようベストな張り具合に固定しています。また、音で振動するように革を張っているので、聴覚だけではなく、触覚にも訴えかけてくる音楽体験が楽しめます」

ボディは3Dプリンタで成形しているが、そのまま用いると「見る人が見れば、3Dプリンタでつくったことがひと目でわかってしまう」とウエダさん。重厚感を出すために、一工夫を凝らしている。

「ボディは研磨し、パテを盛って、削ってを繰り返したのち、マットな質感に仕上げるチッピング塗装を行っています。こうすることで、鋳鉄のような風合いを表現しています」



革とともに 音を育てていく

次に革について触れよう。受賞作に革が使われている部分はおもに3つ。ハウジングとヘッドバンドにはヌメ革を、内側のイヤーパッド（装着時に耳に当たるクッション部分）にはクロムなめしの革を用いている。

「ハウジングとヘッドバンドに使っているヌメ革は、意識してワイルドな風合いのものを選びました。ヘッドホンのようなオーディオが好きな人たちにも、パッと見て革を使っていることが伝わると思います」

一方で、イヤーパッドがクロムなめしの革なのは、耐久性を重視しているためだ。

「イヤーパッドは文字どおり耳に触れるので、タンニンなめしの革を使うといずれ汗で伸びてしまいます。そのため、長く使えるクロムなめしの革を選びました」

一口に革といっても、革はなめし方によって特性が異なる。ヘッドホンの各部位に最適な革を使用することで、合成皮革を用いている既製品とは異なる魅力を付与している。

ヌメ革を用いているプロダクトは、使い込むことで独特の風合いに変化していくが、ヘッドホンも長く愛用することで音質が変わっていくとされている。「変わっていく」と言い切れないのは、科学的根拠がないためだ。

「ヘッドホンのエイジングについては賛否両論があり、賛の立場の人の中でも『経年変化で本当に音が良くなるのか、劣化する可能性もあるのではないか』という議論があるため、使い込むことで音がよくなるという言い方をするのは難しい面があります」

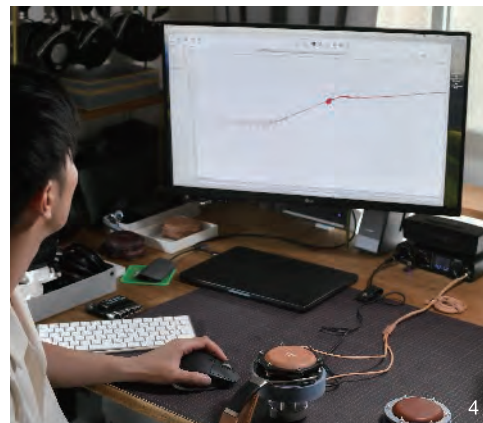


1



2

1. 既製品では見ることのないオリジナリティにあふれるフォルム。2. 「今回の作品には、これまでに習得してきた技術をすべて注ぎ込むことができました」とウエダさん



3.ハウジングに革を張り、ボルトに固定する。4.ヘッドホンとパソコンのソフトを同期して、音の響き方を確認。5.音を鳴らすと革が振動する仕組み。6.ヌメ革を使っているヘッドバンド。箔押しされている「TOMOWORKS」の文字が目立つ

このエイジングについて、ウエダさん個人としては「頭の中で『音が良くなったかな』と考えながら、ヘッドホンというプロダクトとともに生きていく感覚が楽しい」と話す。「エイジングを信じているオーディオファンの中には、鳴らし続けることで音に深みが出てきたという人も確実にいます。革も同じで、使い続けることで味わいが増していく。この2つの組み合わせは新しいはずです」

ウエダさんは、オーディオ機器の製作を主軸としているが、それらに革素材を用いることに楽しみを見出している。

「革の魅力は自由度が高いところ。形を変えられたり、染めたり、縫えたりする素材はなかなかないですし、とくに頭に装着するヘッドホンにはその特性が生かしやすいと思っています。また、革は匂いもいいですね」

今後も、ヘッドホンを中心に製作していきたいというウエダさん。最後に、クリエイターとしてのモットーを聞いた。

「オーディオ製品をつくるうえで、常に個人が製作したようには見えないクオリティを目指しています。もうひとつは、専門メーカーがつからない、つくっていないものを製作したいという思いがあります。既製品と似てしまっては目立たないので、ギミックを取り入れたり革を使ったりすることで、オリジナリティを表現しています」

ウエダさんの作品は、音で振動する「Percussion」のハウジングのように、音楽を楽しむ人の心を震わせ、弾ませるだろう。

革の特性を生かして 誕生した西陣織の靴

京都で千年の歴史をもつ先染めの紋織物・西陣織。三上良弘さんは、大胆にもこの伝統工芸品と牛革を組み合わせた。

「工房があるこの周辺は、西陣織の織元が集まるエリア。以前から西陣織を使った靴をつくれないものかと、考えていたんです」

だが、懸念点は強度だった。歩くことで全体の構造に負担がかかる靴は、革のようにしなやかで強靱な素材が向いている。織物である西陣織では、この使用環境に耐えられないだろうと、半ば諦めていたという。「ヒントになったのが、10年以上前から製作を請け負っている障がい者用の靴でした」

三上さんが手がけているのは、なかでも子ども向けの靴。足首の力が弱い子が多いので、靴自体でしっかりと固定するような構造に仕立てるのだが、そのままでは靴ずれなどが起こりやすくなってしまう。そのため、踵付近の内部にはウレタン製のやわらかいスポンジ材を仕込むという。

「この踵のスポンジが、結果として甲革の負担を減らすことに気がついたんです。これなら西陣織の強度でもいけるな、と」

しかし、そこにはさらなるハードルが。「革は縦横斜め、どの方向にでも伸びるので、釣り込み作業が非常にしやすい。でも、西陣織は縦糸と横糸から成る織物の特性上、斜め方向にしか伸びないんです」

そこで、三上さんはレザーと西陣織を、独自のカッティングで組み合わせた。

「足のカーブに合わせた曲線を出す必要のある箇所にはレザー、比較的平面状でデザインを見せたい部分には西陣織、という具合に配置しました。足の内側と外側で非対称デザインになっているのはそのためです」

また、とりわけ目を引くのは、オリジナルオーダーだという波模様の織生地だ。

「最初は服とコーディネートしやすいようにと、小さめの柄を採用していたんです。でもある時、大ぶりの紋柄を見かけたら、これが意外に良くて」

本作品、クラシカルな印象を与えるが、アッパー（甲を覆う靴の上部）は実はスニーカーの構造。一方ソールは、紳士靴に使われるフォーマルな革底を採用している。

「生地が予想以上にフォーマルな雰囲気だったので、革底が合うかな、と」

斬新な発想に加えて、知識に裏打ちされた構成力と、確かな技術。総合力で勝ち取った、今回のレザーアワード受賞である。



フットウェア部門
ベストプロダクト賞

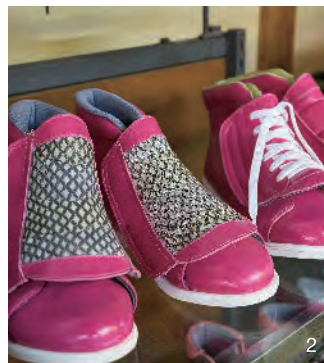
三上 良弘さん MIKAMI Yoshihiro

〈作品名〉 革と西陣織の協奏靴

〈所 属〉 株式会社ネーカース



受賞者動画を
配信中！



1.大学卒業後、紳士靴の製靴店「コバヤシ靴店」で修業を始めた三上さん。14年間の勤務を経て暖簾分けを受け、2011年、「コバヤシ靴店 三上工房」を立ち上げた。ほか、障がい者用の特殊靴「TONE」、異業種とのコラボレーションによる靴「Tie a bond」、革や西陣織を使った筆記具「penmode」、現在は全4つのブランドを運営している。2.本作品完成のヒントをくれた、障がい者用の靴。3.革と西陣織の特性を考えながら起こした渾身の型紙。4.ウレタンのスポンジ材が仕込まれた踵部分。5.工房は、服の縫製職人だった三上さんの祖父が使用していた場所

木下 実さん KINOSHITA Minoru

〈作品名〉 誘引 ウツボカズラ

〈所 属〉 課題商店



受賞者動画を
配信中!



製作依頼は
こちらから



革の可塑性を生かし 食虫植物を靴に昇華

鮮やかな緑に映える、独特の赤い筋。この靴のモデルは、食虫植物のウツボカズラである。虫たちが中へと吸い込まれてしまうように、私たち人間もその魅力に思わず足を滑り込ませてしまう。そんなコンセプトを「誘引」というタイトルで表現したのが、木下実さんによるこのブーツ（くるぶし丈のブーツ）だ。

「靴を履く行為って、『なんだかカッコいい』、『身につけたら楽しいかも』、そうした純粋な欲求があってこそ。そこから、思わず虫たちが近寄っていってしまう、食虫植物をモデルにしようと思いつきました」

実際のウツボカズラを眺めるほどに、その造形美に魅了されていった木下さん。「一体どうやってこの形になったんだろうと思わせる、唯一無二のフォルム。人の手では到底つくりえないデザインをいかに靴の形に昇華するか、チャレンジでした」

製作工程の大半は、実際に革を触りながら具体的な手法を探っていく作業だったという。ここで大いに生かされたのは、濡らすことでその形を自在に変えてくれる、可塑性という革ならではの性質。

「濡らした革をカーブさせたり、つまんで筋をつけたり。試行錯誤を重ねて、まずはアップパー（甲を覆う靴の上部）をつくりました。そこから“釣り込み”というアップパーの革を引っ張って底付けをしていく作業になるのですが、最初はせっかくつけた筋模様が伸びてしまっ。何度も失敗を繰り返しながら、たどり着いたのは芯材として麻ひもを仕込む方法。これにより、最後まで美しい筋模様を残すことに成功しました」

使った素材は、牛のクラストレザー。自分で好きな色合いに染め上げることができる、すっぴんのような、仕上げ前の革だ。

「まずアップパーを成型し、それをスポンジで緑色に染めていきます。乾かしたら釣り込み、赤い色は最後に筆で着色しました。なるべく本物のウツボカズラに近づけたかったので、極力縫い目を見せない仕立てや、ジッパーなどの金具を使わなかった点も、自分なりのこだわりです」

さらに、履き口から中を覗くと、かわいらしい蜂のワッペンが。

「食虫植物ですからね。中に虫がいることはマストかな、と（笑）」

遊び心あふれるデザインと実用性。そのふたつを軽やかに両立させた秀作である。



1.2023年に12年間務めた会社を辞め、日本で唯一「製くつ科」の公共職業訓練を行う「台東分校」で靴づくりを学び始めた木下さん。2.ヒールの巻革から一体成型のループで、ソルを表現。3.同時製作した靴「ハエトリグサ」と、本作のデザイン画。4.濡らした革をつまんで、筋を成形していく工程。5.2025年5月、有害鳥獣の革を使った商品など、世の中の課題と向き合うアイテムを取り扱う「課題商店」を東京・東小金井にオープンした

革（軟）と金属（硬） 対比を楽しむ鞆

4回目のレザーアワード受賞となる野沢浩道さん。今回は2作品セットで、バッグ部門ベストプロダクト賞の受賞となった。よく見ると、どちらもボトム部分に金属のフレームが取り付けられている。

「やわらかい革と、硬質な金属。この相反するふたつの素材のコントラストを見せたい、というのが発想の原点でした」

最初に製作したのは、下部の弧を描いた真鍮フレームにより揺れる、「Rocking Bag」。「フレームはデザイン性だけでなく、ボトムのコバを保護するという役割も担っています」

この真鍮、かなり年月を経たような雰囲気感を漂わせているが、「塩化アンモニウムに浸けて、緑青色に。そこにさらに塩をまぶして、ザラザラとした質感を出しています」と、野沢さん。そして本体に採用したのは、猪のジビエレザーだ。

「ワイルドな雰囲気の革なので、ピカピカした金属との相性は良くない。この革をメインの素材に選んだからこそ、真鍮を緑青加工するアイデアも浮かんできたんです」

取っ手は、蛇革。「猪（亥）」と「蛇（巳）」は、十二支を円状に並べた時に対角線に位置する「向かい干支」になっている。それぞれにないものを捕い合い、幸運をもたらすといわれる縁起のいい組み合わせだ。

そして、もうひとつの受賞作品は、一転、スクエアな形状の「Doc Tote【TIME】」。「A4サイズの書類（Document=Doc）が、封筒ごと入るサイズになっています」

この作品をつくろうと思ったきっかけは、本業の歯科医師として出席する会議で書類を受け取ることの多い、ほかならぬ自身のニーズだったという。革は、栃木レザーの牛革。下部のみを染色し、さらに緑青加工の真鍮フレームとなじむよう、染色した部分に錆のような演出が施されている。

「レザーの魅力は、やはり経年で変化していく表情。一方、薬品加工をした金属は、ここからあまり変化はしない。時間の経過とともに変化するパーツとしないパーツ、その対比のおもしろさを表現してみました」

野沢さんのすごいところは、毎回出品するたびに、新たな手法に挑戦している点。来年の出品作品についても、すでにアイデアは浮かんでいと話す。

「レザーアワードは、僕のものづくりの原動力。何回受賞させていただいても、また挑戦したいと思っています」。



バッグ部門
ベストプロダクト賞

野沢 浩道さん NOZAWA Hiromichi

〈作品名〉 Rocking Bag / Doc Tote【TIME】

〈所 属〉 個人



受賞者動画を
配信中！



製作依頼は
こちらから



1. 歯科医院の院長室の片隅に設けた作業机で、日々閉院後に製作に励んでいる。
2. ジッパー下のタブは、本体と一体成型にした点が野沢さんのこだわり。
3. 真鍮棒の組み立てでは、低い温度で溶ける素材の合金「ロウ」を接着剤代わりに溶かし、本体の金属同士を接合する「ロウ着／ロウ付け」といわれる技法に挑戦。
4. 今回の作品は、珍しく家族からも好評でした(笑)と、うれしそう。
5. 下部の真鍮フレームは、取り外し可能な構造になっている

椎名 賢さん SHIINA Ken

〈作品名〉 slit to stretch

〈所 属〉 Ken Shiina Design Laboratory



受賞者動画を
配信中!

製作依頼はこちらから
417.k.d.lab@gmail.com



スリットで実現した “伸びる革靴”

「伸縮する靴がつかないものかと、ずっと考えていました。そんな時、ふと目に留まったのが、シロナガスクジラを描いた絵本。シロナガスクジラは、エサを海水ごとガバーッと吸い込む時に、お腹が大きく膨らみます。なぜ膨らませることができるのかということ、お腹に縦方向のスリットが入っているから。見た瞬間に、これだ!と」

レザーにスリットを入れ、その裏に伸縮性の別素材をあてがうという手法を思いついた椎名賢さん。しかし、クジラのように縦スリットだけでは、一方向にしか伸びない。そんな時にネットで見かけたのが、カッティングの入った梱包用の緩衝材だった。「商品の上からかぶせると、その形に沿って伸びて、ぴたっと固定されるというものです。このカッティングなら、縦横斜めに伸ばすことができると気がついたんです」

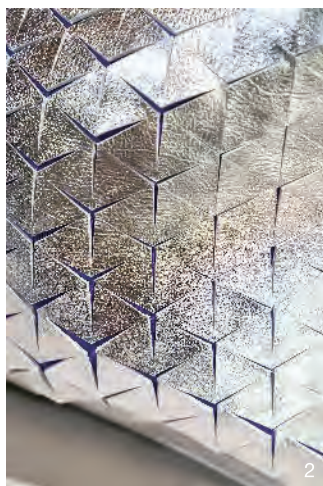
三角形の各辺の端だけをわずかにつなげておくという裁断は、非常に神経を使う作業である。こうしてカットした革は、伸縮性のある裏地と縫い合わせていく。選んだのは、ウエットスーツなどに使われる合成ゴム素材だ。「伸縮性を最大限に高めるため、縫製範囲は極力小さく。それぞれの三角形の中心に、さらにごく小さい三角形を描くような形で、ミシンでひと目ずつ縫い合わせました」

しかし、ここで疑問が浮かんでくる。靴表面の箔を施した美しいレザーには、どこにもミシン目など見当たらない。

「実は、レザー部分は2層になっています。ウエット素材と下側のレザーを縫い合わせたあとに、同じ形にカットしたレザーを、上からもう1枚貼り合わせているんです」

この構造にしたことで、細かいカッティング作業を施す革がもう1枚必要になる。手数の増えるこの仕様を採用した理由について椎名さんは、「縫い目が見えたら、カッコ悪いじゃないですか」と、ひと言。仕上がりのため、妥協を許さないのが彼のものづくりだ。「今回の作品は、自分の得意なことを封印して、逆をやってみた結果。普段つくっているカチッとした硬い靴ではなく、あえて、『中に入れたものによって形が変わることで、むしろカッコよく見える靴をつくろう』というスタンスで臨みました」

今回で、通算5回目の受賞となる椎名さん。毎回レザーアワード出品時には、応募作品だからこそ自分の殻を破ってみようという、彼なりの矜持が込められているのだ。



1・3.「裁断作業中は、記憶が飛んでいる時間帯もありました(笑)」と、製作時を振り返る。2.ものを入れた時の膨らみを楽しむために、あえてマチは設けていない。上部にはホックがあしらわれ、閉めることでさらに靴の膨らみが強調される。4.中面の青い素材が、表面のカットの合間から覗く仕掛け。5.オリジナルブランド「KEN SHIINA」では、ワイルドなレザー素材を使ったハイエンドバッグラインの立ち上げを準備中だという

熟練の職人技が光る 次世代型がまぐち

がまぐちといえば、開閉の際に指先でつまむ突起が特徴だが、受賞作の「TENMIZO GAMAGUCHI #3」はさにあらず。突起がなくスマートなフォルムなのだ。

違いは口金にある。一般的ながまぐちの口金は、溝が下を向いており、外側に突起が付いている。他方、受賞作の口金は溝が上を向いており、突起は内部に収まっている。「TENMIZOシリーズは、薄さとコンパクトさが最大の魅力ですが、それを可能にしているのが天溝口金の存在です」

そう話すのは、ブランド「GNUOYP（ニュピ）」のディレクター、小川陽生さん。わずか1cmの厚みと片手に収まるコンパクトさを可能にする天溝口金こそが、作品の核となっているのだ。

今回の作品に使われている天溝口金は、真鍮職人である川島悠生さんの手によってつくられている。真鍮製ゆえに屈曲などの微調整が可能で、一つひとつの口金を手作業で曲げ、コンパクトなサイズ感と180度開く二つ折りの構造を現実のものとした。

この天溝口金を用いてがまぐちをつくるのは、職人として50年のキャリアを誇る中川守和さん。中川さんは針や糸を使わず、熟練の技術で口金に革を固定させていく。「中川さんは天溝に革をはめ込む革巻きのスペシャリストです。口金を扱える職人が年々減っている中で、とても貴重な存在です」

ちなみに、革は害獣として駆除された鹿の革を使用。キズは極力生かし、一点もののプロダクトに仕上げている。こうして完成した作品について、小川さんは次のように語る。「薄さとコンパクトさはもちろん、片手で持った時の収まりと、鹿革ならではの感触も大きな特色です。また、ワンタッチで開閉するのですが、その時に響く音はとても心地よく響きます。全体的にときめくようなプロダクトに仕上がったと自負しています」

これほどのクオリティのがまぐちを仕上げるには、チームとしての合意形成が必要だ。小川さんは、職人たちとのコミュニケーションを「セッション」と表現する。「僕自身の役割は、職人さんとセッションしてプロダクトの完成度を高めることです。職人さんあっての僕ですからね」

小川さんは、自身が関わる職人の技術に畏敬の念を抱いており、そのレガシーを後世に伝えていきたいと考えている。今回の作品は、そのはじめの一歩である。



ウェア&グッズ部門
ベストプロダクト賞

小川 陽生さん OGAWA Haruo

〈作品名〉 TENMIZO GAMAGUCHI #3

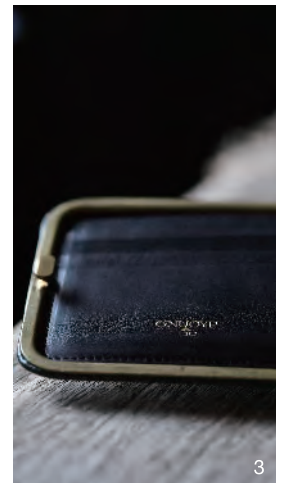
〈所 属〉 GNUOYP（ニュピ）



受賞者動画を
配信中！



購入は
こちらから



1.「TENMIZO GAMAGUCHI #3」に使用する革は、小川さんが型抜きをしている。2.作品づくりには、匠の技を持つ職人とのセッションが欠かせない。3.口金と鹿革の組み合わせに、少し傾いた「GNUOYP」のロゴが目立つ。4.ブランドロゴの型押しも小川さんの役割。5.左から、川島芸所の川島さん、GNUOYPの小川さん、中川守和匠店の中川さん。抜群のチームワークによって作品が完成した

加藤 友樹さん KATO Tomiki

〈作品名〉 ラムレザー スタジアムジャケット

〈所 属〉 有限会社T.M.Y's



受賞者動画を
配信中!



製作依頼は
こちらから



軽く、やわらかい ラム革のスタジャン

ウェア&グッズ部門 フューチャーデザイン賞に輝いたのは、全面にラムレザー（生後1年未満の羊の革）を用いた贅沢なスタジアムジャケット。加藤友樹さんは作品のコンセプトについて、次のように話す。

「ラムレザーの最大の特長である軽さとやわらかさを生かし、気軽に羽織れるスタジアムジャケットをつくりました。僕自身がタンナーで働いているので、『こういうスタジャンをつくりたい』というところから逆算して下地の革をつくることができます」

加藤さんの勤務先は、東京・墨田区を拠点とするT.M.Y's（ティーエムワイズ）というタンナー。ウェアに使用する革を自らの手で製造できるのが最大の強みだ。今回のスタジアムジャケットに使用したラムレザーは、牛革のスタジャンとは一線を画す軽やかさと柔軟性を兼ね備えている。

「牛革だと固さがあるため体にフィットするのに時間がかかりますし、普段使いするのにハードルの高さを感じる人が多いと思います。ラム革であれば初めからやわらかいため、少し肌寒い日にカジュアルに着ることができます。また、着れば着るほどにこなれていって、体になじみフィットしていく感覚はラムレザーならではの感覚です」

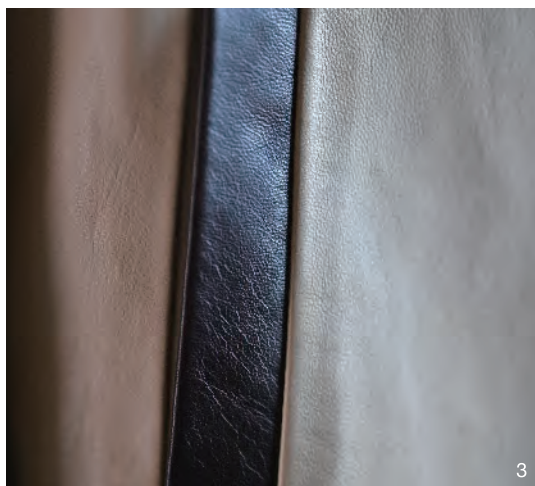
このラムレザーは、軽さとやわらかさだけでなく、ナチュラルな風合いも目を引く。「顔料を厚塗りすると革の表情がなくなってしまうため、そうならないギリギリのところを攻めています。顔料の使用を最小限に抑えた水性染料仕上げにすることで、革の自然な風合いを残しつつ、強度も保てるちょうどいいバランスになっています」

また、革の発色もじつにあざやか。現在、全12色のラインナップを用意しており、購入する場合には、身頃と袖でそれぞれ好みの色をオーダーすることができる。

「色味については、ドラムを使った染色がポイントです。今回使ったラムレザーは素上げに近く、染色がしっかりしていないとムラなどがそのまま残ってしまうので、ドラム染色で下地をきれいに染めています」

加藤さんは、今回のスタジアムジャケットを通して、革の魅力を伝えたいという強い思いを持っている。

「正直に言えば、一番アピールしたいのは革そのものです。ウェアなどを通じて、時間をかけて革を育てる楽しさをたくさんの方に知っていただきたいです」。



1.ドラムで染色した革を入念にチェックする加藤さん。2.タンナーで働いているからこそ、納得いくまで革素材のクオリティを追求することができる。3.受賞作品を含め、あざやかな発色のラムレザーを12色ラインナップ。身頃と袖を異なるカラーにすることも可能だ。4.背面の大胆な刺繍のモチーフは「日出づる国」。5.ジャケットの前面には「Japan」「Tokyo」の文字。インバウンド層へのアピールも念頭に置いている

団扇と財布の 斬新なる融合

山口洋平さんは、移住先の香川県東かがわ市を拠点にするレザークリエイター。受賞作の「leather “丸亀団扇” mini wallet (レザー まるがめうちわ ミニウォレット)」は、同県中西部に位置する丸亀市の伝統工芸品「丸亀団扇」をベースにしている。

「丸亀団扇をつくっている同い年の職人と話しているうちに、革小物の技巧と丸亀の伝統を融合させるアイデアが浮かびました」

団扇に革のミニウォレットの機能を付加するという発想は実にユニークだ。山口さんは、団扇と財布を組み合わせた意図について、次のように語る。

「やはり、丸亀団扇を使ってほしいという思いが一番大きかったです。伝統工芸品とはいえ、お膝元である丸亀市でも団扇を持ち歩く人は明らかに減っています。そんな中で、キャッシュレス時代に合わせてミニウォレットを付け、夏に浴衣を着る時だけでも丸亀団扇を持ってもらえればと考えました」

伝統工芸品としての丸亀団扇はベースとなる竹の骨組みに和紙を貼ったもので、47の工程によって完成する。一方、山口さんの作品は、紙の代わりに薄く漉いた革を貼ることでオリジナリティを表現している。

「革は強度と重さ、扇いだ時の竹のしなり具合を考慮し、0.5～0.6mmに漉いたヌメ革を用いています。和紙と比べるとパワフルな風が起きますし、革独特のいい匂いがするのも特徴です。ちなみに、箔押ししている家紋は丸亀藩・京極家の四つ目結紋です」

団扇にミニウォレットを縫い付ける際には、重量および負荷を最小限に抑え、団扇としての機能を損なわないよう留意している。「団扇に財布を付けたら確実に重くなるので、団扇に貼っている革と同程度に薄い革を用いています。また、竹の骨組みに負荷をかけないように小さなギボシの留め具を使ったり、風を送る際に邪魔にならないよう下部に縫い付けるといった工夫を施しています」

ミニウォレットの革一枚を挟んでも、カード決済OK。機能性は申し分ない。

「浴衣姿だと、バッグを合わせるコーディネートは難しいですが、この団扇を持っていれば、夏のお祭りや花火大会の際に、浴衣姿で簡単にカード決済ができます」

山口さんの工房の名前「Ripple (リップル)」は、さざ波を意味する。今回の受賞が追い風となってさざ波が大波となり、丸亀団扇の復興につながることを期待したい。



フリー部門
ベストプロダクト賞

山口 洋平さん YAMAGUCHI Youhei

〈作品名〉 leather “丸亀団扇” mini wallet

〈所 属〉 atelier Ripple



受賞動画を
配信中!



製作依頼は
こちらから



1. 作品の製作は自身の工房で行っている。2. 団扇に取り付けたミニウォレット。3. 竹の骨組みは団扇職人が製作。4. ミニウォレットを縫う山口さん。5. メーカーに勤務する傍ら、自身の工房「atelier Ripple (アトリエ リップル)」を主宰し、「農業×地場産業」をテーマにバッグの製造、ランドセルのリメイク、アボカドの栽培などに取り組んでいる。今回の受賞について「まさか、という驚きがありました」と、笑顔で語る

国田 来愛さん KUNITA Kurea

〈作品名〉 大阪のおばちゃんの魂

〈所 属〉 兵庫県立姫路工業高等学校



受賞者動画を
配信中!



モザイクで虎を表現 斬新なレザーTシャツ

「動物の顔の立体感を、平面で表現したらおもしろいんじゃないかって。そこで思い浮かんだのが、モザイク柄のお皿。地中海料理のお店とかで見る、小さなタイルを敷き詰めたような食器、ありますよね?」

今回は、タイルの代わりに、小さくカットしたレザーを使用。これを繊細に敷き詰めることで、どう猛な虎の顔面をいきいきと表現した。最終的に完成した作品は、すべて革で仕立てたオールレザーTシャツ。しかし当初は、純粋なアート作品の想定だったと国田来愛さんは言う。

「それだと、コンセプトが弱いんじゃないかって。先生たちと相談していく中でたどり着いたのが、大阪のおばちゃんの象徴ともいえる、アニマル柄のTシャツでした」

大阪で人気のアニマル柄Tシャツを、実際に動物の革で仕立ててしまうという斬新なコンセプト。このテーマが決まると、テーマカラーも自然と絞られていった。

「大阪のおばちゃんって、他人の領域にズカズカと入ってくるような印象があるけど、あれって、分け隔てない愛情があってこそだと思うんです。その愛情を表現するには、ピンクしかないなって。ピンクが映える色ということで、ベースは黒に決めました」

姫路工業高校は、2018年以來、毎年レザーアワードに参加している。作品づくりにあたっては、さすが姫路。複数の地元タンナーが協力し、出品作品の設計やコンセプトに合ったレザーを提案、独自になめしてくれるという。今回、国田さんの作品のレザーを手がけたのは、姫路市のタンナー、株式会社オールマイティだ。

「『よりTシャツらしさを演出するためには、布地に近い薄い革のほうがいい』と提案をいただきました。0.5mmほどの薄さだったのですが、伸びやすいので、裁断も縫製も、かなり気を使いましたね」

国田さんの指導を担当しているのは、姫路工業高校の外部講師、椎名賢さん。レザーアワードの常連で、本年度はバッグ部門フューチャーデザイン賞に輝いており、教え子とのダブル受賞となった。

「国田さんの作品は、『レザー製品はこうあるべき』という固定観念にとらわれない、自由な発想が新鮮でした」

姫路の若き才能は、どんなレザーの可能性を見せてくれるのか。今後の国田さんの製作活動に、さらなる期待が集まる。



1.中学時代の美術の先生の薦めもあり、姫路工業高校に進学した。毎日、片道1時間半かけて通学している。2.「目力を演出したくて、目だけ黄色にしたのがポイントです」と、国田さん。3.構想段階のデザイン画。4.パズルのような型紙に沿って、薄い革を慎重に裁断していく。5.恩師の椎名賢さんと。6.4色のピンクと白、ベースの黒の組み合わせで、見事に立体感を表現。眉の部分にさりげなく採用されたハートのモチーフも、「大阪のおばちゃんの愛情を象徴したものです」と話す

はめ込み技法による リアル“ハンドバッグ”

驚くほどに精巧な、オブジェのような手の造形。しかし実態は、しっかりと実用性を備えた鞆。「これがホントのハンドバッグ」。

そんなひと言が添えられているところに、井藤憲一郎さんの遊び心が垣間見える。「製作のきっかけは、たまたまネットで見かけた、昔懐かしい雰囲気のアンドロイド。陶器のような美しい白色で、関節部分には、別の色のパーツが見え隠れ。これをレザーで表現したい、そう思ったんです」

実は井藤さん、2022年にもレザーアワードで受賞。フリー部門フューチャーデザイン賞に輝いている。その時の作品は、縫製なし、接着材なしで仕上げた、はめ込み技法によるテディベア。今回の「HAND-BAG」にも同じ技法を用いている。

「23年、24年も出品しているんですが、ずっと同じ手法を採用しています」

この技法に出会ってから、5年ほどになるという井藤さん。しかし今回の作品製作には、これまでにない苦労があったようだ。「指の関節すべてが、ちゃんと動くように仕上げたかったんです。テディベアの腕と足も可動式でしたが、あちらは一点を金具で留めただけの単純なつくり。今回は、本物の指のように滑らかに動かして、いかに全体の連動感を出すか、本当に悩みました」

試作に試作を重ねた結果、ひらめいたのは、小さな丸いパーツを関節部分に仕込むというアイデア。

「以前、友人の会社のノベルティとして製作し、プレゼントしたことがあったアイテムなんです。これを中に入れて鉄で留めることで、思い通りの動きになりました」

そうしてできあがった構造は、実にリアル。どんなふうに関節を曲げてても本物の手のようで、ジャンケンだってできてしまう。

「使用したのは、牛のタンニン（植物の渋）なめしレザーです。クロム（塩基性硫酸クロム）なめしだと、やわらかすぎて張りがいい。はめ込み技法で組み上げようとした時に、接合部が抜けてしまうんです」

色は、最初に見た画像に忠実に、白をチョイス。また、接合部のパーツは違う色にして、アンドロイド感を演出したと話す。

「やっと完成してうれしくて。最近では、毎晩かたわらに置いて晩酌していました」

すべての作品に、惜しみない愛情を注ぎ込む井藤さん。だからこそ彼のものづくりは、見る人を魅了してやまないのだ。



アーティスティックデザイン賞

井藤 憲一郎さん ITO Kenichiro

〈作品名〉 HAND-BAG

〈所 属〉 創作工房 井藤



受賞者動画を
配信中！



製作依頼は
こちらから



1.父と祖父が靴職人だった井藤さん。常にハンマーの音が響く自宅兼工房で生まれ育った。「革の端切れを拾ってロボットをつくったり。やっていること、今と変わらないですね(笑)」。

2.ネット上で一目惚れしたアンドロイドをもとに起こした最初のスケッチと、型紙。

3.関節に仕込まれた丸いパーツ。指の滑らかな動きを可能にしている。

4.指の向きを調節すると、自立する。

5.「自分の手を観察しながら製作。右利きなので、作品は左手になりました」

総 評

18回目を迎えた「ジャパンレザーアワード」。2025年の審査では、作品に込められた背景や作者の想いを丁寧に読み解きつつ、革という素材の可能性を追求する姿勢に光が当たりました。既成概念を超えたデザインやライフスタイル視点の提案に、次代への期待と新たな潮流の兆しが感じられます。



フリー部門：フューチャーデザイン賞（グランプリ） / 「Percussion」

特筆すべきことは、「量産ではできない、皮革クラフト技術の中に可能性を見つけたこと」「革の特性を理解し、音質を高める利点があることを再定義していること」「長く愛せるというサステナブル視点から提案していること」。自然素材では木材が音質を高める特性があるとされているが、革もその市場に加わる可能性が十分ある。音質、デザイン、着心地など、五感を満足させるに十二分のヘッドホンの提案であり、革製品のジャンルを広げる秀逸な作品と言える。



フットウェア部門：ベストプロダクト賞 / 「革と西陣織の協奏靴」

採用されている西陣織の独特なパターンデザインが靴全体にリズムを与え奏功している。革の“剛”と織物の“柔”の対比は、日本オリジナルとも言える美しい造形に結びつき、欧米の製品との違いを鮮明にする。こうしたデザインは易々とできるものではなく、作者の長い期間かけての異業種交流、共同作業が結びついた結果と思う。伝統工芸を観光立国の目玉の一つにする政府の取り組みにも大いに便乗し、新しい暮らしの靴をますます提案してほしいと思う。



フットウェア部門：フューチャーデザイン賞 / 「誘引 ウツボカズラ」

インフルエンサーなどを巧みに活用するデザイン手法。そんな情報操作を武器に、靴に新しい息吹を吹き込む“とらわれない発想”は、製品デザインというより情報デザインの範疇であり、その新しい手法、姿勢を評価したい。自分だけ満足する内向きなデザイン提案でなく、情報デザイン的な手法を取り入れ、周りの人と共に楽しむ外向きのデザイン提案は、これからの皮革産業のデザインソリューションとしてとても効果的なやり方と言えるだろう。



バッグ部門：ベストプロダクト賞 / 「Rocking Bag」「Doc Tote【TIME】」

皮革という生き物を原料にする上で大切なのは知性ではないだろうか、と考えさせられた。金属フレームが佇みを描写、不変さを表し、レザーの変化する材料特性と対比させる知には美の秩序がある。また「野性味溢れる《猪(亥)》と《蛇(巳)》は”向かい干支”〜反対の性質を持ち、足りない部分を補い合う」という物語には、風習文化がある。モノとの関係を一度ほどき、もう一度伝統文化を見直し新しく結び直す、そんなアーティスティックな知性がこの作品の源流である。



バッグ部門：フューチャーデザイン賞 / 「slit to stretch」

モチハコブカチの理想は、モノに応じて大きくなったり小さくなったりすること。この作品を手にとった時、理想を真摯に追求する作者の姿が浮かんできた。彫刻家が素材に向き合い、新たな理想を追い求めるように、モノが溢れた世にありながら常に理想のモチハコブカチを希求する仕事ぶりは見本のようである。皮革の材料特性と内部に使用されている素材特性が、かつてない伸縮性を実現、薄い書類を入れてもボールを入れても、どちらの姿も美しく様になる。



ウェア&グッズ部門：ベストプロダクト賞 / 「TENMIZO GAMAGUCHI #3」

財布ほど変化が激しいジャンルは皮革業界において他にない。財布の重厚さは不要となり、軽くカラフルで、小さく薄いものに変わってきた。そうした中、この作品は「今昔良き時代のメーカーさん」を結集し、“今の財布”を提案している。王道を歩む姿勢がいい。財布の機能美と“がまぐち”のワイルドさが一体となったデザインが新鮮で魅力的である。「絶滅危惧手の天満職人」とのタグなどは、社会運動的な側面もあり、意義ある成果として今後の皮革業界を刺激することだろう。



ウェア&グッズ部門：フューチャーデザイン賞 / 「ラムレザー スタジアムジャケット」

革ジャンの重さがない。物理的な重量だけでなく、視覚的にも触覚的にも重さがないのである。また「普通」を真剣に手を抜かずに取り組んでいるためか、モードが陥りがちな独りよがりな感じもない。やわらかな羊革の触り心地や軽快でスポーティな佇まいがそれに寄与しているのか。クラフトマンシップがあって成立する革製品は、どうしても作者のこだわりが前面に出て、つくり手目線になりがちだがこの製品にはそれが無い。消費者オリエンテッドに徹した姿勢は好感が持てる。



フリー部門：ベストプロダクト賞 / 「leather “丸亀団扇” mini wallet」

ハンディファンは暑さを凌ぐため（一の道具）だが、うちわは涼を楽しむ（十の道具）ためにある。「うちわ」＝和紙と決めつけていたため、革素材が「うちわ」にこれほど適しているとは想像もつかなかった。とくにやや縦長で小ぶりの造形が現代的で、“粋”なデザインに仕上がっている。「このポケットにカードを入れれば、何も持たずこれだけで出かけられますね」（審査委員）、これからの温暖の世、革の「うちわ」は長い夏の生活必需品になりそうである。



学生部門最優秀賞 / 「大阪のおばちゃんの魂」

まず「どうして大阪のおばちゃんは…」という疑問を持ったこと、これが出発点なのがいい。そして、大阪のおばちゃんの気持ちに寄り添い、ウチに入っていく優しい気持ちがいい。批判は何も生み出さない、そう美術学校の恩師に習った。この作品はそれを証明している。この作品は作者の観察眼、デザインリサーチの成果が生み出したこと。また、それをさらに従来の手法ではなく、コストも視野に入れた柔軟思想で若々しいデザインとしてつくり上げている点も大いに評価した。



アーティスティックデザイン賞 / 「HAND-BAG」

ロボットの手のようなバッグは、まさに「HAND BAG」である。そんな作者のユーモアの中に作品への想い、時代へのメッセージを感じとった。スマホが普及しバッグに何を入れるのかさえ定かではなくなっている昨今、バッグは「何かをモチハコブ」という機能性を超えて、その人を表す持具（アトリビュート）としての情報端末に昇華している。機能性を超えたこの「HAND BAG」は様々なメッセージを我々に投げかけている。



「ジャパンレザーアワード」のロゴは、革素材のイメージを取り入れたデザインです。柔らかなラインを通じて革の持つ質感や可塑性を表現しています。赤色は革が生命に由来する素材であることを象徴し、生命の力強さや温もりを感じさせる基調色として使用しています。

日本の革文化を未来へつなぐ——進化し続ける 「ジャパンレザーアワード 2025」

日本のレザー文化の発展と認知拡大、そしてプロ・アマを問わず新たな才能の発掘を目的に始まった、国内最大の革製品コンテスト「ジャパンレザーアワード」。18回目となる2025年も、次代のものづくりを担う多彩なクリエイターが集結した。伝統的な技術の継承はもちろん、サステナビリティやジェンダーレスといった時代の価値観を取り入れた作品も増え、コンテストとしての成熟と広がりを感じさせる一年に。素材への情熱と創造性が交錯する場から、2025年を象徴するプロダクトが数多く誕生した。これらの受賞・入賞作品が、今後どのように市場や暮らしの中で息づいていくのか——さらなる展開に期待が高まる。

2つのカテゴリーで評価

ベストプロダクト



日常生活で使用する革製品で、優れた「デザイン力」と、量産品質が確保された「商品力」のある作品

フューチャーデザイン



革素材を使用し、今までにない「新規性」が表現されたデザインや機能を提案する作品

【審査員長】



長濱 雅彦 NAGAHAMA Masahiko
東京藝術大学美術学部教授／専門はプロダクトデザイン。日経デザイン記者を経て長濱デザインオフィス設立。グッドデザイン賞、KSP賞、イエローペンシルなど受賞多数。近年は次世代の生活支援ロボットのデザイン研究などを行っている。



有働 幸司 UDO Koji
ファッションデザイナー。東京モード学園卒業後、株式会社BEAMS入社。退社後ロンドンに留学。帰国後、国内ブランドの立上げに参加。その後独立し、FACTOTUMをスタートさせる。現在、モード学園の特別講師も務める。



中山 路子 NAKAYAMA Michiko
東京都出身。服飾学校を卒業後、アパレルメーカーに勤務。2002年「モスライト (MOSSLIGHT)」の設立に参画し、2006年春夏コレクションより海外に進出。2007年春夏モスライト解散後、2007-2008年秋冬より「ミュベール (MUVEIL)」をスタート。



廣田 尚子 HIROTA Naoko
デザインディレクター／ヒロタデザインスタジオ代表／女子美術大学教授。ビジネスデザインを立脚点に企業戦略・インナーブランディング・プロダクトデザインまでを総合的に手がける。RED DOT DESIGN AWARD、IF Design賞、グッドデザイン賞他受賞多数。



政近 準子 MASACHIKA Junko
パーソナルスタイリスト創始者。東京スタイル(デザイナー)を経てイタリアへ移住。帰国後に個人向けスタイリングサービスを提供する「ファッションレスキュー」を設立。政治家、経営者、企業管理職、起業家などの富裕層を主に顧客に持つ。著書12冊。



若杉 浩一 WAKASUGI Koichi
プロダクトデザイナー／インテリアデザイナー／ソーシャルデザイナー。武蔵野美術大学、クリエイティブノバーション学科教授に2019年4月より着任。1959年熊本県天草市生まれ。九州芸術工科大学工業設計学科卒業。